

仏教用語集

《あ行》

【アショーカ王】(アショーカウ) あいく 阿育あいく王と音写する。古代インドにおけるマウリヤ王朝第3代の王。在位、BC. 268～232年。在位中に仏教に帰依。アショーカ王碑文は仏教史・インド史を解明するための第1級史料。

【阿毘達磨】(アビダツマ) サンスクリット語アビダルマ、パーリ語アビダンマの音写。阿毘曇、毘曇などとも音写する。対法、論などと訳される。經典に説かれた仏教の要義を分類整理したり、あるいは分析的に解説を加えたもの。

【阿弥陀経】(アマダキョウ) 『無量寿経』のサンスクリット名も同名であるため、区別して『小無量寿経』『小経』『四紙経』ともいう。浄土教の根本經典の一つで、紀元前1～2世紀頃、北西インドで成立。阿弥陀仏が説法している極楽浄土の莊嚴の様子を説き、浄土に往生するために阿弥陀仏の名号を執持すること(称名念仏)を勧め、六方の諸仏がこれを証明していると説く。浄土三部経の中で最も短いので、読誦用に広く用いられる。

【一向宗】(イツコウシュウ) 浄土真宗の俗称。一向(ひたすら)に阿弥陀仏の名

号を称えることで念仏往生することを信じていたことからつけられた名称。蓮如は『御文』においてこの呼称を否定している。⇒浄土真宗

【一遍智真】(イツペンチシン) 1239(延応1)～1289(正応2)年。鎌倉時代中期の僧。時宗の開祖。最初に延暦寺で天台宗を学び、後に太宰府で浄土教を学ぶ。いったん還俗するも念仏を勧進する決意を固めて四天王寺・高野山を経て、熊野に参籠して靈験を受け、以後念仏札を配り(賦算)、空也の踊念仏を民衆に勧め全国を遊行したことから遊行上人、また、すべてを捨て去ったところから捨てひりとも称せられた。法語に『一遍上人語録』があり、伝記に『一遍上人絵伝(一遍聖絵)』がある。

【隠元隆琦】(インゲンリュウキ) 1592(中国万暦20)～1673(日本寛文13)年。明代中国臨濟宗の禪僧。江戸時代1654(承応3)年に中国より招かれ日本黄檗宗の開祖となる。京都妙心寺の住持に迎える動きがあったが愚堂東菴らの反対でならず、1661(寛文1)年宇治に黄檗山万福寺を開創した。ちなみに隠元豆は、明国から日本に移植して広めた。また普茶料理も伝えた。

【ヴェーダ】アーリヤ人が伝えた古代インドのバラモン教の聖典の総称で、

神の啓示によって著された聖典とされる。リグ・サーマ・ヤジュル・アタルヴァの 4 ヴェーダに分かれる。各ヴェーダはサンヒター・ブラーフマナ・アーラニヤカ・ウパニシャッドなどの諸部門から成る。このヴェーダ文献に基づいて成立している宗教がバラモン教である。

【ウパニシャッド】 ヴェーダの第 4 部門に相当し「奥義書」と訳される、秘密の哲学思想説。宇宙の本体であるブラフマン(梵)と人間の本質であるアートマン(我)、そして、両者の関係が一体であること(梵我一如)を哲学的に深く追求している。ウパニシャッドには仏教成立以前の古いものから、比較的新しいものまでさまざまある。

【栄西】(エイサイ) 明庵栄西。「みんなんようさい」とも読む。1141(永治 1)～1215(建保 3)年。日本臨済宗の開祖。比叡山で天台密教を修め、その後 1168(仁安 3)年と 1187(文治 3)年の 2 度の入宋を果たし、その間に天童山の虚庵懐敏より臨済宗黄龍派の教えを受け日本に臨済禅を伝えた。また、中国から茶種を持ち帰って、日本で栽培することを奨励し、喫茶の法を広めた「茶祖」としても知られている。著作に『興禅護国論』『出家大綱』『喫茶養生記』などがある。

【慧能】(エノウ) 638～713 年。六祖大師、六祖慧能とも称す。中国唐代の

禅僧。中国禅宗の大成者。中国の禅宗は 5 祖弘忍の頃から大教団へと発展し、弘忍のあとは、神秀と慧能という 2 人のすぐれた弟子がつぎ、神秀の北宗禅と慧能の南宗禅の 2 系統に発達したが、後世、南宗禅が禅の主流を形成することになり正統と認められ、慧能は禅宗 6 祖として位置づけられた。慧能の事跡は不明な点が多いが、説法を記録したものととして『六祖壇経』がある。

【円仁】(エンニン) 794(延暦 13)～864(貞観 6)年。慈覚大師と称す。天台宗山門派の祖。第 3 世天台座主。最澄に師事したが、師の没後入唐し、悉曇・密教を学び、五台山で念仏三昧法を学んで帰国。比叡山に台密の充実をはかり、また五台山の引声念仏を採り入れ天台浄土教の発祥となった。在唐 9 年の旅行記である『入唐求法巡礼行記』4 巻は有名である。

【往生要集】(オウジョウヨウシュウ) 3 巻(本末 6 巻) 源信が 984(永観 2)年 11 月より翌(寛和 1)年 4 月にかけて著述された極楽往生の経文を体系的に撰集した書で、代表的浄土教典籍。阿弥陀仏の極楽に往生するためには、念仏が最も大切であることを明らかにした。この書の説は『栄花物語』『枕草子』などの平安文学や浄土教美術の「地獄絵」「六道絵」などの規範となり、大きな影響を与えた。

【黄檗宗】(オウバクシュウ) 中国及び日

本における禅宗の一派。中国のそれを古黄檗、日本のものを新黄檗と区別する。日本では、江戸時代初期の1654(承応3)年に明朝の中国福建省黄檗山万福寺から招請に応じて弟子を伴って来日されたいんげんりゆうき 隠元隆琦りんざいを開祖とする。「臨済しょうしゅうおうぼくは正宗黄檗派」から1876(明治9)年に一宗として臨済宗から独立、「黄檗宗」を公称し、本山を京都府宇治市の黄檗山万福寺に置く。万福寺は中国の明朝様式を取り入れたがらん伽藍配置で、山号寺号は、隠元禅師ゆかりの中国万福寺にならって「黄檗山万福寺」と名付けた。鉄眼道光は、隠元禅師から貰い受けた万曆版大蔵経をもとに鉄眼版大蔵経を完成。また、千葉椿沼干拓事業や新田てつぎゅうを開拓した鉄牛や、日本最初の図書館事業をおこしたりょうおう了翁、中国の工法で山口県岩国の錦帯橋架橋を指導したどくりゅう独立など、黄檗僧が日本文化に与えた影響は大きい。

【踊念仏】(オドリネブツ) ゆやく 踊躍念仏ともいう。平安中期のくうや空也が京都の市中で太鼓や鉦を打ちながら拍子をとって念仏しながら踊ったのがはじめてであったが、いっぺん一遍が1279(弘安2)年信州佐久で踊りながら念仏を唱えた。それ以来、時宗の重要な法儀として伝承されることになった。『一遍聖絵』によると、空也が踊念仏をはじめたものであり、一遍がそれを復興したという。

【御文】(オフミ) 本願寺派では『御文

しょう章』と呼ぶ。本願寺8世のれんにょ蓮如が真宗の教義を門徒に簡潔で分り易く書き与えた消息体(手紙の形)の法語で、蓮如の布教はこの形を中心に行われ、真宗の普及に果たした役割は極めて大きい。現在、約250通が伝えられ、その中で、1471(文明3)年から1498(明応7)年にわたる58通と、年次不明の22通の合計80通を収集して5冊にまとめた『五ご帖御文』が最もよく知られている。

《か行》

【開目抄】(カイモクシヨウ) 2巻。日蓮りっしょうあんこくろん著。『立正安国論』『観心本尊抄』とともに日蓮三大部の一つ。1271(文永8)年に佐渡に流罪された日蓮が、翌年に法難に対する弟子や信徒の疑念をはらすために著したもの。末法の大導師の自覚が表明されていることから、日蓮宗では「人開頭にんかいけんの書」とされる。

【覚鑊】(カクバン) 1095(嘉保2)～1143(康治2)年。こうぎょう興教大師と称す。平安時代に活躍した真言宗の僧。真言宗中興の祖にして新義真言宗始祖。東密・台密の事相を総合して伝法院流を開いた。1134(長承3)年金剛峯寺と大伝法院のざす座主を兼任し、東寺の支配から高野山を独立させるなどしたが、金剛峯寺勢力と折り合わず、1140(保延6)年身の危険を避けるため高野山から離れて根来寺ねらいに本拠を置き、ここで没した。

【元曉】(ガンギョウ) 617～686年。「げ

んぎょう」ともいう。朝鮮仏教を代表する新羅しらぎの学僧。『華嚴経』をはじめ、大乘思想全般にわたって幅広く研究した碩学で、『大乘起信論』に基づく独自の立場わじょう(和諍の思想)で対立するさまざまな論争や諸説の調停に努めた。著作は新羅で重用されただけでなく、中国においても「海東疏」と称して尊重された。日本でも、奈良時代に著書が将来され、南都仏教を中心として尊重されており、高山寺こうざんじの「華嚴縁起」は明恵みょうえが元暁げんせうと義湘の事跡を描かせたものとして有名。

【鑑真】(ガンジン) 668(中国垂拱4)～763(日本天平宝字7)年。奈良時代中期の律師。5度の渡日の失敗により失明したが、ついに753(天平勝宝5)年に来日、東大寺に戒壇を開設し戒をさずけた。その後、唐招提寺とうしやうだいじを建立し、そこに住んだ。

【観心本尊抄】(カンジンホンゾンシヨウ)

1巻。日蓮著。詳名は『如来滅後ごご五ご百歳始ひやくさいし観心本尊抄』という。『立正安国論』『開目抄』とともに日蓮三大部の一つ。佐渡流罪中の1273(文永10)年に著された。本書は佐渡流罪以後、新たに日蓮が確立した信仰の基底を最も体系的に公開したものであり、日蓮宗では「法開頭ほうかいけんの書」とされる。

【観無量寿経】(カンムリョウジュキョウ)

1巻。『観無量寿仏経』『無量寿観経』ともいい、『観経』と略称される。浄土

三部経の一つ。劉宋きょうりゅうやしやの曇良耶舎訳とされるが、サンスクリット原典もチベット訳も伝わらず、類似した経典がウイグル語で伝えられているだけで、インド撰述であるかどうか疑問視されている。阿闍世太子が提婆達多あじやせ だいたにそそのかされて、父の頻婆娑羅王びんばしやらを幽閉し餓死させようとした王舎城の悲劇を導入部として、極楽世界や阿弥陀仏、観音・勢至2菩薩の観想の仕方および九品往生の観想を説く。

【義湘】(ギシヨウ) 625～702年。新羅華嚴の初祖。662年から唐の智儼ちこん(華嚴宗2祖)について法蔵ふっせきじ(華嚴宗3祖)と共に華嚴教学を学び、670年に帰国し676年に太白山に華嚴の根本道場浮石寺を創建、さらに全国に華嚴十刹を建立して、新羅華嚴宗を広めた。著書に『華嚴一乘法界図』がある。京都の高山寺蔵『華嚴縁起』は明恵が義湘と元暁の事跡を描かせたものである。

【吉蔵】(キチゾウ) 549～623年。嘉祥かじやう大師と称す。中国の六朝末から隋・唐初にかけて三論の教学を大成した学僧。法朗ほうろうについて三論を学び、会稽かいけい(浙江省紹興県)の嘉祥寺に住し、後に煬帝ようだいの請いで揚州(江蘇省)の慧日道場に入り、ついで長安の日嚴寺にちこんじに住して多くの僧俗の帰依を受けた。吉蔵の学識は群を抜いて高く、とくに三論・法華などの諸大乘経典にも精通し、主著は『三論玄義』『大乘玄論』や注釈書の『法華義

疏』などが多数ある。

【行基】(ギョウキ) 668(天智 7)～749(天平 21)年。奈良時代の法相宗の僧。15歳で出家して道昭・義淵どうしやう ぎ えんに法相教学を学んだ。やがて、704(慶雲 1)年頃から民間布教と社会事業を展開し始め、支持する多くの民衆ら率いて、道路や池・溝・港・橋ふせやなどの社会事業施設を造り、行基菩薩と呼ばれ民衆の絶大な信仰を集めた。こうした活動は僧尼令に違反するものであったので5度にわたって中止を命ぜられ、弾圧もされるが、国も743(天平 15)年の東大寺大仏建立事業には行基の力を借りることとなり、建立に協力した功績によって745(天平 17)年聖武天皇から我が国で最初の大僧正の位を授けられた。行基の伝説は『日本霊異記』など仏教説話集に多く見られる。

【教行信証】(キョウギョウシンシヨウ) 6巻。親鸞著。詳名は『顕浄土真実教行証文類』という。教・行・信・証・真仏土・化身土の6巻からなり、阿弥陀仏の願文を根拠にして広く経論や法然の文章から引用し、それに注釈を加えて浄土真宗の教義を宣揚したもの。

【清沢満之】(キョザワマンシ) 1863(文久 3)～1903(明治 36)年。真宗大谷派の僧、宗教哲学者。宗門改革運動などにより宗門近代化に尽力。

【空海】(クウカイ) 774(宝亀 5)～835(承和 2)年。弘法大師と称す。平安時

代の僧で、真言宗の開祖。奈良旧仏教から平安新仏教へと転換する流れの最初期に、日本において真言密教を確立した。18歳で役人になるために大学明経科に入学し中国の諸学問を学んだが、大学を辞して山岳修行に入り、797(延暦 16)年『三教指帰』を著し仏教の優位を説く。804(延暦 23)年留学僧として最澄とともに入唐。空海は翌年青龍寺の恵果に師事して灌頂を受け、真言の秘義を授けられた。806(大同 1)年に多くの経典・曼荼羅などの密教道具を請来し帰国して高雄山寺に住した。812(弘仁 3)年から814(弘仁 5)年にかけて最澄とも交わり、高雄山寺で最澄とその弟子たちに灌頂を授けたが、密教観の相違などで交際は決裂した。815(弘仁 6)年頃から本格的な密教の布教活動を行い、道場建立のため高野山の下賜を請うて翌年勅許され金剛峯寺を建立。823(弘仁 14)年には嵯峨天皇より東寺(教王護国寺)を給預され、ここを密教の根本道場とした。828(天長 5)年綜芸種智院を開設し、広く門戸を解放して一般の人々に内典・外典を教授した。『弁頭密二教論』『即身成仏義』『秘蔵宝鑰』『十住心論』など多くの著作をなし真言教学を確立した。空海は詩文にも勝れ『性霊集』がある。また能筆家としても知られ(三筆の一人)、『風信帖』『響響指帰』などの真筆が現存する。

【空也】(クウヤ) 903(延喜3)～972(天

禄 3)年。「こうや」ともいう。平安中期の念仏聖、踊念仏の祖とされる。諸国を遊行し民衆に浄土信仰を広め、各地で南無阿弥陀仏の名号を唱えながら道路や橋を補修したり、荒野に遺棄された死骸を火葬にして供養するなどの社会奉仕につとめ、938(天慶 1)年京都に入って、市井に念仏を広めた。このことから人々は空也を阿弥陀聖・市聖と呼ぶようになった。京都六波羅蜜寺にある空也像は面影を写していると有名。

【瑩山紹瑾】(ケイザンジョウキン) 1268(文永 5)～1325(正中 2)年。常済大師と称す。鎌倉中期の曹洞宗の僧。永平寺 2 世孤雲懷奘について得度し、懷奘が入寂すると、永平寺 3 世で加賀(石川県)大乘寺 1 世の徹通義介に師事し、諸国行脚ののち大乘寺 2 世となる。1321(元亨 1)年能登に総持寺(現在は横浜市鶴見に移転)を開創し教団の基礎を築いた。曹洞宗では福井の永平寺と鶴見の総持寺の二大本山制をとり、道元を高祖、瑩山を太祖として尊崇している。

【華嚴經】(ケゴンキョウ) 詳名は『大方広仏華嚴經』といい、華嚴宗の根本となっている經典で、東晋の仏馱跋陀羅が訳した 60 巻本を「六十華嚴」、唐の實叉難陀訳の 80 巻本を「八十華嚴」、『華嚴經』の「入法界品」だけを増広した唐の般若訳の 40 巻本を「四十華嚴」と称する。サンスクリット語で「仏の

華飾りと名づけられる広大な經」とされ、大別すると、釈迦の悟りの世界を説いた「毘盧遮那品」と、菩薩が仏の境地に向かって進みゆく過程を説いた「十地品」と、善財童子が真理を尋ねて遍歴する求道物語を説いた「入法界品」に分けられる。

【華嚴宗】(ケゴンシュウ) 中国の初唐時代に、代表的な大乘經典『華嚴經』に基づき大成した華嚴教を研究する学派。開祖は杜順、第 2 祖智儼、第 3 祖法蔵、第 4 祖澄観、第 5 祖宗密と相承されている。また、この中国の 5 祖の前に、2 世紀頃のインドの馬鳴と龍樹を加えて 7 祖ともする。日本における華嚴宗は、3 祖法蔵門下の審祥によって天平 8 年(736 年)に伝えられた南都六宗の一つ。奈良の東大寺を大本山とし、『華嚴經』の教主「毘盧遮那仏」を安置する大仏が建立され、この東大寺を総国分寺とする国分寺の組織も整備された。明恵によって密教思想が取り込まれ、さらに凝然による教学の確立がなされた。

【玄奘】(ゲンジョウ) 602～664 年。中国唐代初期の訳経僧。一般には三蔵法師、玄奘三蔵の名で知られる。国禁を犯して出国し、天竺(現在のインド)から膨大な經典を持ち帰り、翻経院(国立の翻訳場)において弟子たちと經典の翻訳に専念した。彼の旅行記は『大唐西域記』は、7 世紀の中央アジアやインドを知る上で貴重な文献である。『西

遊記』は玄奘の旅する姿をモデルとしている。

【源信】(ゲンシン) 942(天慶5)～1017(寛仁1)年。平安中期の天台僧。比叡山で良源に師事。横川に隠棲して『往生要集』を著し、日本浄土教に大きな影響を与え、良忍(融通念仏宗)・法然(浄土宗)・親鸞(浄土真宗)たちの立宗の基盤となった。また、『一乗要決』を著して天台教学が盛行するにいたった。源信は臨終にあたって阿弥陀如来像の手に結びつけた糸を手にして、合掌し入滅した。

【公案】(コウアン) 禅の問題、または問題。もとは、中国の公府の案牘(政府の定めた公式布告)の意味であったが、のちに禅宗で、師が弟子を悟りへ導くために研究推考させる問題を意味するようになった。

【興禅護国論】(コウゼンゴクロン) 3巻。栄西著。仏教における戒律の重要性を説き、禅を興すことはその国を守護することになると、諸経論を引用して証明し禅の大綱を論じた。

《さ行》

【最澄】(サイチョウ) 767(神護景雲1)～822(弘仁13)年。平安時代の僧。日本天台宗の開祖。諡号は伝教大師。785(延暦4)年東大寺で具足戒を受け、同年、比叡山に登り山林修行に入る。802(延暦21)年入唐求法の還学生(短期留

学生)に選ばれ、804(延暦23)年通訳に門弟の義真を連れ天台に登り、中国天台7祖の道邃や行滿について天台教学を究め、さらに道邃に大乘菩薩戒を受け、順暁から密教、儻然から禅の伝授も受けて翌年帰朝し、806(延暦25)年、年分度者(国家が認める僧侶)を勅許され円(天台教学)・密・禅・戒の四宗を総合する天台法華宗を開創した。最澄は密教の充実を図り空海の弟子となったが、両者の仲は離れ交際絶えた。その後、東国を訪れ会津の法相宗の徳一との間に、三一権実の論争が展開され、816(弘仁7)年帰山し、以後死去までの間、三一権実の論争と大乘戒壇独立の運動に努めた。三一権実の論争については『照権実鏡』『守護国界章』『決権実論』『法華秀句』などを著し、大乘戒壇独立については『山家学生式』『顕戒論』があり、『内証仏法血脈譜』を書いて正統性を説いた。

【三経義疏】(サンギョウギシヨ) 聖徳太子撰と伝えられる『法華義疏』4巻・『勝鬘経義疏』1巻・『維摩経義疏』2巻の3種の經典の注釈書の総称。聖徳太子撰述を疑う説もある。日本の仏教がまだ最初期の時代に、独自の注釈を加えたことは高く評価され、日本仏教の出発点としての意義が大きい。

【山家学生式】(サンゲガクシヨウシキ) 最澄撰。嵯峨天皇に奏上した六条式・八条式・四条式の3式の総称。南都仏

教に対し、山家(天台宗)の修行規定を明確にして、天台宗の独自性と独立性を宣言した重要宗典である。

【三教指帰】(サンゴウシキ) 3巻。空海著。797(延暦16)年空海24歳の時の作で、出家の宣言書といわれる。儒教・道教・仏教との3教の思想を比較して、仏教が最も優れていることを述べている。なお、『三教指帰』の草稿本と考えられる空海の真筆『聾瞽指帰』2巻(国宝)が高野山金剛峰寺に現存する。

【サンスクリット語】(サンスクリットゴ)「完成された」という意味に由来し、インド=ヨーロッパ語に属する古代インドで宗教・学術・文学等の分野で公用語的役割を果たしていた言語。中国や日本ではブラフマー(梵天)が造った言葉という伝説から梵語とも呼ばれる。

【只管打坐】(シカントザ) 祇管打坐とも書く。ただひたすら坐禅すること。道元は中国黙照禪の伝統をつぐ如浄の「参禅は坐禅なり」を受けて、只管打坐を強調した。

【時宗】(ジシュウ) 遊行宗ともいう。一遍が文永11年(1274年)に熊野権現より念仏賦算賦算(念仏の札をくばること)の神託啓示をうけたときを開宗とする浄土教の一宗派。神奈川県藤沢市の清浄光寺(遊行寺)を総本山とする。一遍は「阿弥陀への信・不信は問わず、念仏さえ唱えれば往生できる(口称念仏)」と説いて諸国を遊行し、踊念仏を

行い念仏を勧進し、賦算を続けた。以来歴代の遊行上人は開祖の行跡にならって全国を遊行した。

【島地黙雷】(シマジモクライ) 1838(天保9)～1911(明治44)年。幕末から明治期の浄土真宗本願寺派の僧。1868(明治1)年京都で赤松連城らとともに本願寺の機構改革を建白した。廃仏毀釈に対して本願寺教団ならびに日本仏教界を代表して明治新政府に寺院寮・教部省の設置を建議し、また神道国教政策に対しても新政府に信教自由論を唱えて抵抗を展開した。

【釈迦】(シャカ) 仏教の開祖。釈迦牟尼(シャーキャ=ムニ、釈迦族の尊者、釈尊)の略。前463年～前383年、一説に前566年～前486年、南方伝承では前624年～前544年という。

姓をゴータマ(ガウタマ、瞿曇)、名をシッダールタ(悉達多)という。父シュッドーダナ(浄飯王)と母マーヤー(摩耶)の間にシャカ族の王子として、現在のネパール南部のカピラヴァスツ(迦毘羅城)の郊外ルンビニー園で4月8日に生まれた。生後7日目に生母を失い、叔母マハーブラジャーパティー(摩訶波闍波提)によって育てられた。16歳でヤショードラー(耶輸陀羅)と結婚し、息子ラーフラ(羅睺羅)をもうけた。

古代インドでは哲学は宗教と不可分の関係にあり、バラモン教の聖典「ヴェーダ」と「ウパニシャッド」の内容

を絶対の真理とみなす立場が正統派であり、そうでない立場は非正統派とされてきた。BC. 6世紀頃から「ヴェーダ」や「ウパニシャッド」にとらわれず、バラモン階級の権威を認めない、新しい自由な思想が興ってきます。釈迦もその潮流を受けて、「生老病死」などの人生の無常の現実^{じゆんじつ}に苦悩する毎日を過ごした。釈迦以外に六人の代表的な思想家がいたとされ、仏典では「六師外道^{ろくしげどう}(6人の異端思想家)」と呼んでいます。

ついに29歳のとき、周囲の猛反対を押し切り、社会的地位も家族も捨て出家した。この出家の顛末を表わしたのが「四門出遊^{しもんしゅつゆう}」の話である。

はじめアーラーダ=カーラーマ、次にウドラカ=ラーマプトラという仙人に入門して修行したが満足できなかった。次いでひとりマガダ国ウルヴィルヴァー(苦行林)に入り7年間(一説には6年間)の不眠や断食の苦行をつづけた。短期間でかなり高い境地を得たが、それが完全な悟りの境地とは思えなかった。

そこで釈迦は、山中の苦行を中止して山を下り、ナイランジャナー川^{にれん}(尼連禪河^{ぜんが})のほとりでも苦行を積んだが、いたずらに肉体を痛めるつける苦行の虚しさに気づく。そしてスジャータという村娘^{ちがゆ}から乳粥(ヨーグルト)の布施を受けて体力が回復すると、ブッダガヤ

ー(仏陀伽耶)の菩提樹の下で瞑想に入った。瞑想は21日間続いた。そして、ついに12月8日の未明に完全な悟りの境地に達して35歳でブッダ(仏陀)となりました(成道^{じやうどう})。

解脱の直後、ブッダは、真理は非常に難解なため他者には伝えられないと考えたが、梵天の説得もあって思い直し(梵天勧請^{ぼんてんかんじよう})、かつてともに苦行をしていた5人の仲間の住むヴァーラーナシー(波羅奈国^{はらなこく})の郊外にあるムリガダーヴァ(鹿野苑、現在のサールナート)に行き、彼等のために説法を行った(初転法輪^{しよてんぼうりん})。

ブッダの悟りの内容についてはさまざまな意見がある。一般的には、すべては原因があって結果があるという「縁起^{えんぎ}」を発見し、「四諦^{しだい}」(苦・集・滅・道の四つの真理^{はつしやうどう})と「八正道(八聖道)」(解脱に至るために必要な八つの聖なる実践徳目)を明らかにしたことである。また仏教修行には、まず基本として、「戒^{かい}(仏教者として守るべき規則^{じじよう})・定(心身を静める瞑想法^{ぜんじじよう})=ヨーガ=禪定)・慧(教えを理解する智慧、論理的な思考から生まれる智慧、実践から得られる智慧)」の三つ(三学^{さんがく})の実践が必要であると説いた。

さらにブッダは旧来の身分制度(カースト)を否定し、真理へ道は常に万人に開かれていると説いた。こうした教えは深遠なことはもちろん、当時として

は極めて斬新でもあり、都市に住み商工業に従事する知的水準の高い人々を中心に、仏教は支持者の数を次第に増やしていきました。

その後も釈迦は一所に止まることなく、主としてガンジス河の中流域を旅しながら民衆の教化につとめ、在俗の信者を増やしていった。ラージャグリハ(王舎城)では、ビンビサーラ(頻婆沙羅)王の帰依を受け、伽藍(竹林精舎)を寄進されサンガ(僧伽、教団)としての基礎を築くことができた。このようにしてサンガの構成員はだんだんと増加し、やがて最後の伝道の旅に出て、クシナガラ城外の沙羅双樹の間に、頭を北にして最後の説法をして80歳で入滅された。時に前383年2月15日のことであった。仏教徒はこの日に、釈迦を慕い、死を偲ぶための法会(涅槃会)を行っている。

仏陀入滅の後、その遺骸は荼毘に付され、その遺骨(舍利)と遺灰は分配されたという。

【修験道】(シュゲンドウ) 日本古来の山岳宗教が、仏教・道教・儒教・シャーマニズム・神道の影響のもとに、平安時代末頃にまとまった宗教体系をなしたもの。超自然的な力に基づく呪術的な活動を修験者・山伏を中核とする。

【守護国界章】(シュゴコクカイシヨウ) 9巻。最澄撰。法相宗の徳一が『中辺義鏡』を著し、法相唯識の立場から天台

教学に批判を加えたのに対して、818(弘仁9)年最澄が一乗真実の立場から反駁した、いわゆる「三一権実論争」初期の書。

【上座部】(ジョウザブ) 仏陀の没後100年ほどして、十事の非法、大天の五事などの「律」の解釈で意見が対立して引き起こされた根本分裂によって生じた部派の名で、保守的・形式的な上座部と革新的な大衆部とに分裂して、部派仏教時代と呼ばれる。上座部は教理・戒律ともに伝統を重視する傾向が強かった。これからさらに説一切有部・犢子部・化地部・正量部・経量部・法蔵部・飲光部などが分派した。現在スリランカ(セイロン)、ミャンマー(ビルマ)、タイなどの南方仏教圏で行われている仏教もこの系統に属しテーラヴァータ(上座部)仏教とか南方上座部と称され、南伝仏教と呼ばれることもある。

【聖徳太子】(ショウトクタイシ) 574(敏達3)～622(推古30)年。飛鳥時代の政治家。用明天皇の第2皇子。厩戸皇子・豊聡耳・上宮太子・聖王・法王などともいう。叔母である推古天皇が初の女帝として即位した翌593(推古1)年に推古天皇の皇太子となり、摂政として叔父であり時の大臣であった蘇我馬子とともに内外の政治の整備に携わった。その事績として高く評価されるものとしては、603(推古11)年に冠位十二階を制定、翌年には憲法十七条を制定し、

607(推古 15)年に小野妹子^{おののいもこ}を隋へ派遣して国交を開き前後 4 回の遣隋使の派遣によって大陸の文化・制度の導入につとめ、さらに晩年の 620(推古 28)年には『天皇記』『国記』など国史の編纂を行い、またとくに仏教興隆に力を入れ『法華経』『維摩経』『勝鬘経』の3経典について「三経義疏」という註釈書を著し、法隆寺・四天王寺を建立するなど多くの事績を残した人物とされている。ただし「三経義疏」については真撰説・偽撰説が論議されている。

【浄土宗】(ジョウドシュウ) 鎌倉時代に法然が中国浄土教の祖善導の教説をとり、専修念仏(極楽浄土に往生するために、ただひたすらに阿弥陀仏の名を称えること)を宗旨として開いた宗派。法然の『選択本願念仏集』はその立宗の教義を著したものとされる。京都の知恩院を総本山とする。

【浄土真宗】(ジョウドシンシュウ) 親鸞を開祖とする宗派。一向宗ともいわれる。法然の教えをよりいっそう徹底し「念仏を称えれば、すべての人が浄土へ往生できて成仏できる」とした。『無量寿経』を唯一の根本聖典とし、親鸞の著した『教行信証』は立教開宗の書とされる。8 世蓮如は活発に布教活動を展開し、今日の大教団の基礎を築いた。徳川家康の宗教政策により、それ以前からあった元来親鸞の廟堂であった本願寺を西として、東西両本願寺の 2 派

に分れた。そのほかにも分派して東西本願寺を含めて真宗 10 派という。

【正法眼蔵】(ショウボウゲンゾウ) 道元撰。曹洞宗の根本宗典。1231(寛喜 3)年から 1253(建長 5)年までの 23 年間にわたる説示を集め和文で綴ったもの。正伝の仏法とは何か、坐禅の本質と普遍性、日々の修行のあり方と意義など、仏教のあらゆる事柄が論じられている。75巻本・12巻本・60巻本・84巻本・89巻本・95巻本などがある。

【勝鬘経】(ショウマンギョウ) 大乘仏教の代表的経典。サンスクリット原典は断片的にしか現存しないが『究竟一乘宝性論』などに引用があり、チベット訳もある。漢訳に求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乘大方广方便経』1 巻と菩提流志訳『大宝積経』第 48 会として「勝鬘夫人会」としての異訳がある。波斯匿(パセーナディ)王の娘である勝鬘夫人が法を説く形をとり、如来蔵による一乘思想を説く。大乘仏教の在家主義を示すものとして有名である。

【真言宗】(シンゴンシュウ) 弘法大師空海が平安時代の延暦 23 年(804 年)に入唐、恵果より真言密教を学び、秘宝を伝授されて帰国して開いた宗派。即身成仏と密厳国土をその教義とする。日本の仏教宗派の中では最もさまざまな門派に分裂派生しており、古義真言宗(始祖、空海の直系的教義)3 派、新義真言宗(中興の祖、覚鑿の教学を元とし

た真言宗の新たな教義) 15 派に大別され、真言宗 18 本山と呼称される。

【親鸞】(シンラン) 1173(承安3)～1262(弘長2)年。鎌倉新仏教の祖師の一人。浄土真宗の開祖。範^{はん}宴^{えん}・綽^{しゃく}空^{くう}・善^{ぜん}信^{しん}などとも称す。9歳で天台宗青蓮院の慈円^{じえん}のもとで出家、のち比叡山に上るも20年間の修行は悩みを解決してくれず、1201(建仁1)年に京都六角堂に参籠^{さんろう}し、そこで聖徳太子の夢告を得て法然の下に参じ、法然の他力本願の教えを究めたが、1207(建永2・承元1)年の念仏弾圧により、法然は四国流罪され、親鸞は越後流罪となったが、1211(建暦1)年赦免になり、1214(建保2)年家族とともに常陸(茨城県)に移住し、京都に帰るまでの約20年間ほど関東各地で布教した。60歳を過ぎてから家族ともども京都に帰り、晩年の30年間は弟の天台僧尋有^{じんゆう}の寺などを転々とし、教化と『教行信証』の補訂推敲に努めた。

【鈴木大拙】(スズキダイセツ) 1870(明治3)～1966(昭和41)年。仏教哲学者。本名貞太郎。学生時代、鎌倉円覚寺でいままたこうぜん^{いまたこうぜん} しゃくそうえん^{しゃくそうえん} 今北洪川・釈宗演について参禅、大拙の道号を受けた。1897(明治30)年釈宗演の推薦で渡米、出版社に勤めながら仏教思想を研究。『大乘起信論』を英訳、『大乘仏教概論』を英文で出版し、1909(明治42)年帰国後、東京帝国大学や学習院大学で教鞭をとり、1921(大正10)年大谷大学教授に就任。同年東方仏教

徒協会を設立し、英文雑誌『イースタン=ブディスト』を20年間刊行。またしばしば欧米を歴訪して日本文化・仏教・禅思想の紹介に努めた。1949(昭和24)年日本学士院会員。文化勲章受章。

【世親】(セシン) ヴァスバンドウの新訳名で、旧訳では天親^{てんじん}と呼び、婆藪槃豆と音写する。5世紀頃のガンダーラ地方(パキスタン)プルシヤプラ(現在のペシャーワル)の人で、無著(アサンガ)の弟。唯識派三大論師の一人。初め部派仏教の説一切有部で『大毘婆沙論』を学び、『俱舍論』を著し大乘仏教に批判的であったが、後に兄の無著から大乘仏教を勧められて大乘に転向し、大乘転向後は唯識思想を学び、『唯識三十頌』『成業論』『大乘五蘊論』『大乘百法明門論』『仏性論』『往生論』(『浄土論』)など、さらには『中辺分別論』『大乘莊嚴經論』『撰大乘論』などに対する注釈書を著し、唯識思想を体系化することに努めた。この教学が中国・日本に伝わり撰論宗・法相宗・俱舍宗となった。

【選択本願念仏集】(センチャクホンガンネンブツシュウ) 1巻。略して『選択集』ともいう。1198(建久9)年、関白九条兼実^{かねざね}の要請^{ようせい}によって法然が著した。浄土真宗では「選択」を「せんじゃく」と読む。浄土三部経の経文やそれに対する道綽^{どうしゃく}や善導^{ぜんどう}などの解釈を引き、それに対して法然自身の私積を加えるという形で展開する。阿弥陀仏が浄土を

建立するために立てた四十八願の中から第十八願に立脚して称名 一行の専修を主張し、浄土宗の独立を宣言した浄土宗の立教開宗の書であり、教義の集大成となっている。

【曹洞宗】(ソウトウシュウ) 中国禅宗五家七宗(瀧仰宗・臨濟宗・曹洞宗・雲門宗・法眼宗)の五家に臨濟宗から派生した黄龍派・楊岐派を加えたもの)の一つで、洞山良价と曹山本寂とを派祖とする。日本の曹洞宗は、入宋して如浄の法を学んだ道元によって開かれた。道元は越前に永平寺を開き弟子に宗風を伝え、その後4世瑩山が能登に総持寺を開き地方豪族や一般民衆に広まっていった。開祖道元を高祖、瑩山を太祖とし、永平寺・総持寺(現在地は、神奈川県横浜市に移る)を両大本山とする。

《た行》

【大衆部】(ダイシュブ) 仏陀の没後100年ほどして、十事の非法、大天の五事などの「律」の解釈で意見が対立して引き起こされた根本分裂によって生じた部派の名で、保守的・形式的な上座部と革新的な大衆部とに分裂して、部派仏教時代と呼ばれる。大衆部は、上座部の過去・現在・未来の三世にわたって法の本体は実在しているとする三世実有・法体恒有説を否定して、法は現在においてのみ実在し、過去・未来には非実在であるという現在有体・過

未無体を主張し、大乘仏教の萌芽となった。大衆部からは一説部・説出世部・鷄胤部・多聞部・説仮部・制多山部・西山住部・北山住部などに分派した。

【大日經】(ダイニチキョウ) 詳名は『大毘盧遮那成仏神變加持經』といい、善無畏訳、7巻。7世紀初期にインドで成立したと考えられる密教の經典であるが、サンスクリット原典は未発見、チベット訳は現存する。密教教理を体系的に説いた密教の根本經典で、中国と日本の密教に大きな影響を与えた。

【台密】(タイミツ) 日本天台宗に伝承されている密教を真言宗の東密に対していう。最澄(根本大師流)以来、円仁(慈覚大師流)・円珍(智証大師流)の根本3流があり、さらに10流が分出して発展した。⇒東密

【題目】(ダイモク) 書籍の表題や講演の表題の意味であるが、經典の題号を唱えると大きな功德があることから、日蓮は『法華經』の功德を「妙法蓮華經」(五字の題目)と「南無妙法蓮華經」(七字の題目)に象徴して、唱題することを強調した。

【ダライ=ラマ】 チベット仏教ゲルク派(黄帽派)の最高活仏の称号。ダライとは、その名のギャンツォ(大海)に当たるモンゴル語。ラマとは、師僧を意味するチベット語。14世紀にツォンカパが開いたチベット仏教のゲルク派に属し、ツォンカパの弟子で甥のゲン

ドゥン=ドゥッパ(第 1 世)の 3 代目の生まれ変わりソナム=ギャンツォ(第 3 世)に師事したモンゴルを実質的に支配するアルタン=ハンが 1578 年ダライの称号を贈ったのが初めてであり、この系統の転生活仏を代々ダライ=ラマと呼ぶ。1 世・2 世は追贈されたものである。その 2 代後のロサン=ギャンツォ(第 5 世)が、チベットを支配教化すると信じられていた観世音菩薩の化身の転生者と見なされ 1642 年政権を掌握したので、以来チベット王の俗称となった。第 14 世(テンジン=ギャンツォ)は、チベットの独立を求めて活動したが 1959 年以降北インドのダラムサーラに亡命政権を立て現在に至っている。

【他力本願】(タリキホンガン) 阿弥陀仏の本願によって衆生が救済されること。そのはたらきかける力(他力)は阿弥陀仏の誓われた四十八願にもとづくものである。とくに第十八願を指す場合もある。転化して、人まかせにして物事を成し遂げようとするに使われることがあるが、これは本来の意味からは逸脱している。

【智顛】(チギ) 538 ~ 598 年。中国天台宗の開祖であるが、慧文・慧思につぐ第 3 祖ともされる。天台大師・智者大師ともいう。18 歳で長沙(湖南省)果願寺で出家し、560 年光州大蘇山(河南省)の慧思のもとで法華三昧を体得した。そして金陵(南京)瓦官寺で『法華

経』や『摩訶止観』を講じた。575 年天台宗(浙江省)に籠り、修禪に励み天台教学を体系づけた。のち陳の後主や隋の統一後は晋王広(煬帝)の帰依を受け故郷荊州に玉泉寺を創建、天台三大部といわれる『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』を講説、晋王に『維摩疏』を献じ、ふたたび天台山に帰って没した。法華三昧・三諦三観・一念三千・五時八教など独自の思想は、中国仏教形成の第一人者と称され、日本の仏教に与えた影響も極めて大きい。天台三大部の他にも『次第禪門』『六妙法門』『天台小止観』など多数を著した。

【ツォンカバ】 1357 ~ 1419 年。チベット仏教ゲルク派(黄帽派)の開祖。正式な名をロサン=タクパという。中国青海省のツォンカ(西寧付近)の生まれであるためこの称がある。16 歳で中央チベットに赴き、顕密の教義を学んだ。チベットの仏教を大きく改革し、1409 年ラサの大昭寺で大願法会を執り行った。同じ年にラサの郊外にガンデン寺を建立して本山とした。ツォンカバは文殊菩薩の化身であるといわれている。著書には『菩提道次第論』や『秘密道次第大論』などがある。

【天台宗】(テンダイシュウ) 中国隋の智顛(天台智者大師)を開祖とする宗派。『法華経』を根本聖典とし、智顛の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』(法華三大部あるいは天台三大部)を依りどこ

ろとして教義を確立している。日本の天台宗は、平安時代延暦 24 年(805 年)に伝教大師最澄が入唐し、翌年帰国し日本に伝えたのがはじまりで、智顛を高祖とし、比叡山を開いた最澄を宗祖とする。大乘菩薩戒を提唱して円頓戒壇を設立、長く日本の仏教教育の中心のとして栄え、鎌倉時代に浄土宗・浄土真宗・曹洞宗・日蓮宗などの新しい宗旨を唱える多くの学僧を輩出した。

【道元】(ドウゲン) 希玄道元。1200(正治 2)～1253(建長 5)年。鎌倉時代の僧。日本曹洞宗の開祖。父は内大臣久我通親(一説に通具)、母は太政大臣九条基房の女。3 歳で父を、8 歳で母を失う。13 歳のとき比叡山の叔父・良観を訪ね、翌年座主公円について得度。後に三井寺(園城寺)の公胤を訪ね、その指示によって建仁寺を訪い、栄西の高弟子 明全に師事。1223(貞応 2)年明全とともに入宋した。天童山その他を歴遊し、再び天童山に帰って長翁如浄より印可を受け 1227(安貞 1)年帰国してしばらく建仁寺に寓したが深草安養院に移り、1233(天福 1)年興聖寺を開き、住すること 10 余年、この時期より『正法眼蔵』の撰述につとめた。1243(寛元 1)年波多野義重の請により越前(福井県)志比荘に移り、翌年に大仏寺を造立、1246(寛元 4)年には寺名を永平寺に改め、接化(弟子の教化指導)と著述につとめた。1253(建長 5)年永平寺を懐契に譲り、

上洛し俗弟子覚念の邸宅で寂した。曹洞宗では高祖と称する。著書に『正法眼蔵』の他『普勸坐禪儀』1 巻、『学道用心集』1 巻、『永平清規』2 巻、『永平広録』10 巻などがある。

【道昭】(ドウショウ) 道照とも書く。

629(舒明 1)～700(文武 4)年。奈良時代の法相宗の僧。河内国(大阪府)丹比郡船連の出身。653(白雉 4)年遣唐使の一員として入唐し、玄奘に師事して法相教学(一説には撰論教学)を学び、660(斉明 6)年頃帰朝、法興寺(飛鳥寺・元興寺)の東南に禅院を建てて住し、このとき請来した經典類を収め、日本に初めて法相教学を伝えた(南寺伝、飛鳥伝)。晩年は全国を遊行し、各地で土木事業を行った。遺命によりわが国で初めて火葬に付されたという。

【東密】(トウミツ) 空海の開いた東寺(教王護国寺)を根本道場とする真言密教の意で、日本天台宗の台密の対。空海の教理の解釈や師資の法脈などによって多くの流派を生じ、野沢根本 12 流(小野 6 流・広沢 6 流)と称し、その後も分化した。⇒台密

【曇鸞】(ドンラン) 476～542 年とするが生没年は不明。中国北魏の僧。浄土五祖の第一、真宗七高僧の第三。五台山の近く雁門(山西省代県)の生れ。出家して、中観派の四論(『中論』『十二門論』『大智度論』『百論])や『涅槃経』の仏性義を学んだ。ところが『大集経』

の注釈の最中に病に倒れ、不老長寿の法を茅山の道士陶弘景について学び道教経典を得て帰る途中、洛陽で菩提流支に出会い、仏教にこそ不死の教えがあると諭され、『観無量寿経』を授けられた。そこで、仙經を焼き捨てて、浄土教に専心するようになった。晩年は并州石壁の玄中寺に入り、浄土教義を確立した。その主著『往生論註』（『浄土論註』『論註』とも呼ぶ。正式名は『無量寿経優婆提舍願生偈註』）は世親・菩提流支訳『往生論』の註釈書である。他に『讚阿弥陀仏偈』がある。

《な行》

【南伝仏教】（ナンデンブッキョウ）スリランカ・ビルマ（ミャンマー）・タイ・カンボジア・ラオスなどの国々に現存している仏教の総称で、南方仏教ともいう。西北インドから中央アジア（シルクロード）を通り、中国・朝鮮・日本に伝わった北伝仏教（大乘）に対して、南方仏教は小乗といわれるがこの表現は適切ではない。南方仏教国では上座部仏教とかテーラヴァーダと呼ぶ。パーリ語三蔵とその注釈書などを収録した大蔵経（南伝大蔵経）を保持し、出家と在家信者とははっきりと分かれ、出家修行者は釈尊の仏教の伝統を保持し、戒律を厳守し在家信者の尊敬を受けている。

【南都六宗】（ナントロクシュウ）奈良時

代、平城京を中心に栄えた国家仏教を代表する六つの宗派の総称。法相宗・三論宗・俱舎宗・成実宗・華嚴宗・律宗の六宗をいう。

【日蓮】（ニチレン）1222（貞応1）～1282（弘安5）年。鎌倉時代の僧侶。日蓮宗・法華宗各派の宗祖。安房国（千葉県安房郡）小湊で誕生。12歳のとき清澄寺へ入り、16歳で出家得度し、是生房蓮長の名を与えられた。その後、鎌倉や京都を経て、比叡山に遊学。その結果、『法華経』こそが釈迦の真実の教えであるとの確信に至った。1253（建長5）年清澄寺に帰り、「南無妙法蓮華経」の題目を唱えた。日蓮宗ではこのときを立教開宗とする。しかし、法然の浄土念仏に批判を加えたことがもとで故郷を追われ、鎌倉へ至って松葉谷に草庵をむすび、伝道活動を開始。禅宗や念仏宗などの他宗派を批判。このころ日蓮と改名した。当時は各地に天災地変・社会不安が続出したが、日蓮はその原因は邪法の念仏や禅の充満にありとし、念仏の停止と法華信仰の確立を訴えて1260（文応1）年『立正安国論』を著し、前執権の北条時頼に上進した。しかし、この建白はかえって諸方面からの反発をかい、松葉谷の草庵が焼き討ちされ、さらに1261（弘長1）年伊豆流罪され、許されて鎌倉に帰った後も1271（文永8）年幕府や諸宗を批判したとして腰越龍口刑場にて斬首されかけたが、一等

を減じて佐渡に流された。流罪中の 3 年間に重要教義を記す『開目抄』『観心本尊抄』を著述した。1274(文永 11)年赦免となり鎌倉に戻るが、幕府要人に自説がいれられず、ついに鎌倉を立ち、甲斐国(山梨県)身延山に退き 9 年間、弟子の養成や『撰時抄』などの著述活動を行った。病の療養のため常陸(茨城県)の湯へ赴く途中、武蔵国の信徒池上宗仲邸(今の東京池上本門寺)に立ちより休息するが、死期をさとった日蓮は後事を託す本弟子として日朗・日昭・日興・日向・日頂・日持の 6 老僧を定めこの地に没した。

【日蓮宗】(ニチレンシュウ) 鎌倉時代中期に日蓮によって興された仏教の宗派。釈尊の説いた法の極意が『法華経』にあるとの教判に基づき、法華宗とも称する。身延山久遠寺を総本山とする。

【念仏】(ネンブツ) 心に仏を思念することや口に仏名を唱えることであるが、今日では、阿弥陀信仰と結びつき「南無阿弥陀仏」と阿弥陀仏の名前を称える口称念仏(称名 念仏)を意味するようになった。

《は行》

【白隠慧鶴】(ハクインエカク) 1685(貞享 2)～1768(明和 5)年。江戸時代中期の臨済宗の僧。駿河国(静岡県)に生れ、15 歳のとき松蔭寺で出家。諸方を参禅し雲棲株宏の『禅関策進』に接して修

行に奮起し、信濃国(長野県)飯山の正受老人のもとで大悟し、その法を嗣ぐ。

1716(享保 1)年に松蔭寺に住して多くの著作を残し、各地からの招請に応じて教化活動をして臨済宗中興の祖とされる。主な著作に『槐安国語』『遠羅天釜』『夜船閑話』『坐禅和讃』など多数がある。また、書画にも秀でていた。

【八宗綱要】(ハッシュウコウヨウ) 2 巻。華厳宗東大寺の凝然が 1268(文永 5)年に著した仏教概説書。南都六宗(三論・法相・華嚴・律・成実・俱舍)および平安二宗(天台・真言)の八宗について解説し、最後に禅宗と浄土宗を付記する。

【般若経】(ハンニャキョウ) 紀元前後ころに成立し、長い期間にわたって増広・編集された大乘仏教最初期の經典群。詳名は『般若波羅蜜多経』といい、智慧(般若)の完成を説く經典の意味。はじめて大乘(摩訶衍)の語を用いた大乘仏教の先駆的經典で、サンスクリット本・漢訳本・チベット訳本と多数がある。この經典群の中で最古といわれる支婁迦讖訳『道行般若経』、最大の玄奘訳『大般若波羅蜜多経』600 巻、短縮された『般若心経』などがある。

【普勸坐禅儀】(フカンザゼンギ) 1 巻。道元著。宋から帰朝した直後の 1227(嘉禄 3)年に『禅苑清規』の坐禅儀を参考にしながら道俗に仏道を修行するための正しい坐禅の心得を著した書。

【仏陀】(ブッタ) サンスクリット語ブ

ツダの音写。目覚めた人、悟りに到達した人の意。もともとはインドの宗教全般において、すぐれた修行者や聖者に対する呼び名であった。仏教では、一般的に釈迦をさす。

【プトゥン】 1290 ~ 1364 年。チベットを代表する学僧。『チベット大蔵経』（ナルタン版）の整理・編集で名高い。『プトゥン仏教史』はインド・チベット仏教の通史として最も権威あるものとされる。

【法蔵】（ホウゾウ） 643 ~ 712 年。中国唐代の華嚴教学の大成者。華嚴宗第3祖。賢首大師げんじゅ・香象大師こうぞうと称される。長安の人こうきよ（康居（サマルカンド）出身の祖父が帰化して長安に住んだ）。長安雲華寺で智儼の『華嚴経』の講義を聴いて弟子となり、智儼没後の 670 年に出家して太原寺に住した。『華嚴経』を講ずること 30 余回といわれ、華嚴教学の研鑽・宣揚に努めた。著書に『華嚴経探玄記』『華嚴五教章』『起信論義記』などがある。

【法然】（ホウネン） 1133（長承2）~1212（建暦 2）年。平安時代末期から鎌倉時代初期の僧。浄土宗の開祖。諱を源空いみな げんくうという。美作みまさか（岡山県）の人。押領使漆ま ときくに間時国の子で、9 歳のとき夜討によって父を失うが、遺言によってあだ討ちを断念する。13 歳で比叡山に入り、15 歳のとき皇円こうえんについて出家。1150（久安 6）年 18 歳のとき黒谷えいくうの叡空に師事して

法然房源空と名のり研鑽を積んだ。そして 1175（承安 5）年 43 歳のとき善導ぜんどうの『観無量寿経疏』かんむりやうじゆきやうしよによって専修念仏せんじゆねんぶつに開眼し、比叡山を下りて東山吉水に住み念仏の教えを弘めた。この年を浄土宗では立教開宗の年とする。1186（文治 2）年大原勝林院しょうりんいんで聖浄二門を論じ（大原問答）、1198（建久 9）年『選択本願念仏集』せんちやくほんがんねんぶつしゅうを著した。一方、旧仏教からの非難も激しくなり、1204（元久 1）年比叡山の僧徒は専修念仏の停止を迫って蜂起し、翌年には興福寺の奏状により念仏停止を訴えた。1207（建永 2・承元 1）年弟子の住蓮・安楽が女官を院に無断で出家させたことが口実となった死罪となった事件を契機として、75 歳の法然は土佐（高知県。実際には讃岐（香川県））に流罪となった。同年、許されて法然は摂津（大阪府）かちお であの勝尾寺に滞在。1211（建暦 1）年東山大谷に帰り、翌年 1 月 23 日、弟子の源智に『一枚起請文』を与え、2 日後に 80 歳で生涯を閉じた。

【法華経】（ホケキョウ） 『妙法蓮華経』みょうほうれんげきやうの略で、代表的な初期大乘経典の一つ。現存の漢訳本は、竺法護じくほうご訳『正法華経』しやうほう 10 卷 27 品、鳩摩羅什く まらじゆし訳『妙法蓮華経』8 卷 28 品、闍那崛多じゃな かつた・達磨笈多だつまぎやうた共訳『添品妙法蓮華経』てんぽん 7 卷 27 品があり、またチベット語訳などがあるが、鳩摩羅什訳が最も多く用いられてきた。日本では、聖徳太子の『法華義疏』（真偽問題がある）以来、鎮護国家の三部経の一

つとして尊崇され、天台宗・日蓮宗の根本聖典となっている。

【菩提達摩】(ボダイダルマ) ?～530?年。菩提達磨とも書き、単に達摩・達磨と略称される。経歴・事跡ともに不明な点が多く、さまざまな伝説がある。禅宗の伝灯における西天第28祖であり、インドより中国に禅を伝えたことにより中国禅宗の初祖と呼ばれる。嵩山しやうりんじの少林寺で独り壁に向かって9年にわたり坐禅をしていた(面壁九年)ので足が腐ってなくなってしまったという伝説から、達磨の張り子人形が江戸時代になると七転び八起きの縁起達磨として信仰を集めた。

【法相宗】(ホツウシュウ) 中国唐代に中インドから玄奘が帰国して、ヴァスバンドゥせしんの『世親ゆいしきさんじゆうじゆの唯識三十頌』をダルマパーラごほう(護法)が注釈した唯識説を主としてまとめた『成唯識論』を訳出編集し、玄奘の弟子の慈恩大師基じおんだいしき(一般に窺基)がその『成唯識論』に基づいて開いた宗派である。そのため、唯識宗・慈恩宗とも呼ばれる。日本での法相宗は、入唐求法僧にっとうくほうそう(道昭・智通など)により数次にわたって伝えられ、元興寺がんごうじと興福寺を中心として学ばれ、南都六宗のうちもっとも有力な宗派として栄えた。

《ま行》

【曼荼羅】(マンダラ) サンスクリット

語マンダラの音写で、曼陀羅・曼拏羅とも書く。壇、聚集、輪円具足などとも訳される。仏・菩薩を安置して祭るために、円形状、あるいは方形状の神聖な壇に配置した図で、宗教的世界観を表現した図像。

【明恵】(ミョウエ) いみな こうべん 諱は高弁。1173(承安3)～1232(貞永1)年。鎌倉時代の華嚴宗中興の祖。紀伊(和歌山県)の人。幼くして両親をなくし、高雄の神護寺で出家し、16歳のとき東大寺で受戒。神護寺で密教を学び、東大寺では華嚴を学び、帰朝した栄西について禅を究めた。1206(建永1)年後鳥羽院より梅尾山うづねを賜わり、高山寺こうざんじを建てて華嚴の道場とした。法然の『選択本願念仏集』が著されると、これに対して『摧邪輪』を著し専修念仏を厳しく批判した。また、栄西が宋から将来した茶の木を梅尾に植えたことも有名。

【夢窓疎石】(ムソウソセキ) 1275(建治1)～1351(観応2)年。鎌倉時代末から室町時代の臨済宗の僧。伊勢(三重県)の人。はじめ天台・真言を学び、のち高峰頭日に参じて禅を修め法を嗣ぐ。その後、南禅寺なんぜんじ・円覚寺えんかくじなどの住持となり、臨川寺りんせんじや天龍寺てんりゆうじの開山となる。また、足利尊氏に鎌倉末以来の戦乱に落命した人々の菩提のため全国に安国寺あんこくじ・利生塔りしょうとうの設置を進言した。作庭の才にも優れ西芳寺ははじめ、天龍寺・永保持えいほじなどが有名。著作には『夢中問答』

集』『夢窓国師語録』『西山夜話』その他がある。

【無量寿経】(ムリョウジュキョウ) 2巻。康僧鑑訳。初期大乘經典で浄土三部経の一つ。『阿弥陀経』を『小経』というのに対して、この経を『大経』または『大無量寿経』と呼び、2巻あるところから『双卷経』、48願が説かれることから『四十八願経』ともいう。法蔵菩薩が四十八願をたて、願行を成就させ阿弥陀仏となり、一切衆生を救済することを明らかにし、極楽往生を願う人びとに称名念仏を説く。

《や行》

【唯識】(ユイシキ) 空の思想を受けつとも、あらゆる現象や存在はただ自己の心識によって作り出された仮のもので、心を離れて存在するものはないとする見解。法相宗の根本教義。

【維摩経】(ユイマギョウ) 初期大乘經典の代表作の一つ。鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』3巻。『維摩詰経』『不可思議解脱経』ともいう。ほかに支謙・玄奘による漢訳とチベット語訳が現存する。大乘仏教の奥義に達したといわれる在家の維摩詰(ヴィマラキールティ)を主人公に、病床の維摩を見舞った仏弟子の文殊菩薩と大乘仏教のあり方を問答形式で展開する。禅宗で重要視され、また日本文学にも多大の影響を与えた。

【融通念仏宗】(ユウズウネンブツシュウ)

大念仏宗ともいう。開祖は良忍。1117(永久5)年、良忍が阿弥陀仏じげんの示現を得て授かった融通念仏の偈に基づき、自他の念仏は融通しあって浄土に往生することが約束されるとして、日課に口称念仏すべきことを勧める。大阪市平野区の大念仏寺を総本山とする。

《ら行》

【ラマ教】(ラマキョウ) チベット仏教、またはチベット系仏教をいう俗称。「ラマ」の尊称を持つ活仏を尊崇することからラマ教という俗称でも呼ばれたともいわれるが、近世以降チベット仏教への蔑視・誤解から使用されてきた時期もあり、現在はこの俗称はあまり好ましくないとされ、ほとんど使われない。

【律宗】(リッシュウ) 中国北魏ねいこうの慧光等が宣揚した『四分律』しふんりつをもとに成立した仏教の一学派。道宣どうせんの南山律宗、法励ほうれいの相部宗、懷素かいその東塔宗の3派が生まれたが、南山律宗だけが栄えた。日本には、南山律宗系の鑑真が754(天平勝宝6)年来朝して伝え、南都六宗の一つとされた。現在は、唐招提寺を本山とする律宗と、西大寺を本山とする真言律宗がある。

【立正安国論】(リッショウアンコクロン)

1巻。日蓮著。1260(文応1)年鎌倉幕府前執権北条時頼ほうじょうときよりに呈上した諫暁書かんぎょうしょ。頻

発する災害の原因が、正法しょうぼうである『法華経』に背き、悪法ほうねんである法然ほうねんの専修念仏せんじゆねんぶつに帰依しているからである。それ故、念仏を禁止して正法である『法華経』に帰依すれば国土の安穏が実現する。しかしこのままだと「自界叛逆難」(内乱)と「他国侵逼難」(侵略)が起これると予言している。日蓮三大部の一つ。

【龍樹】(リュウジュ) ナーガールジュナの漢訳名。150 ~ 250 年頃の人。南インドに現れた初期大乘仏教を確立した大論師。南インドのビダルバのバラモン出身で、幼い頃から多くの学問を習得したが、後に仏教に帰依し部派仏教と初期大乘を学び、「空」の思想を大成し、大乘仏教の基礎を体系化した。彼の教えは後の仏教全般に決定的影響を与え、中国や日本では「八宗の祖」と仰がれている。主著に『中論』『廻諍論』『宝行王正論』のほか、真作を疑う説があるが『大智度論』『十住毘婆沙論』などがある。

【臨済義玄】(リンサイギゲン) ? ~ 867 年。唐末の中国臨済宗の開祖。曹州(山東省)南の人。諡号は慧照禪師。経律論を学んだのち、黄檗希運おうぼくきうんに師事し、その禅風を受け嗣いだ。その後、鎮州(河北省)の沱河のほとりに小院(臨済院)を営み禅の宣揚を行った。晩年に魏州(河北省)大名府の興化寺に移り、その地で没した。禅の指導にあたっては、「臨済の喝」の異名が表すように、厳しく鋭

いことで知られ、中国禅興隆の頂点を極めた。言行を弟子の慧然が編集した『臨済録』は語録の王といわれている。

【臨済宗】(リンサイシュウ) 中国禅宗五家七宗(瀉仰宗・臨済宗・曹洞宗・雲門宗・法眼宗)の五家に臨済宗から派生した黄龍派・楊岐派を加えたもの)の一つで、唐代の禪僧、臨済義玄を開祖とする。坐禅と公案(師が弟子を悟りへ導くために参究の課題として与えられる)を使うことで知られる。日本の臨済宗は、鎌倉時代に栄西が中国に渡って禅を学び伝えた宗派の一つで、中国の臨済禪師を宗祖とする(臨済は日本には来ていない)。時の武家政権に支持され、政治・文化に重んじられた。

【蓮如】(レンニョ) 1415(応永 22) ~ 1499(明応 8) 年。室町時代の僧。本願寺 8 世。本願寺 7 世存如の長男。当時、異宗や他派に押されていた本願寺にあって父を補佐し、堅田や金森を中心に近江(滋賀県)を教化し有力な門徒を得た。1457(長祿 1) 年存如が没し、父の後を継いで本願寺 8 世となる。活発な布教に対して危機感を抱いた延暦寺はこれを無礙光宗として排斥、1465(寛正 6) 年比叡山衆徒による大谷本願寺の破却にあい、近江各地を転々とし、1471(文明 3) 年越前(福井県)吉崎に吉崎御坊を建立。門徒は北国から東海・東国・奥州に及び、守護富樫氏との間に軋轢を生じたために、吉崎を出て摂津・河内

・和泉を教化し、1480(文明 12)年山城(京都府)の山科やましなに本願寺を建て、教化は一層拡大した。1489(延徳 1)年 75 歳で五男じつじよの実如じつじよに後を譲り隠居したが、その後も布教を続け、1496(明応 5)年には摂津(大阪府)生玉庄なまたまに石山本願寺を建立する。1499(明応 8)年山科本願寺に帰り 85 歳で没する。親鸞しんらんの『正信偈』しょうしん(『正信念仏偈』)『三帖和讃』を開版して朝晩の勤行に用いるよう制定し、教義を手紙の形で分り易く説いた『御文』おふみ(『御文章』ごぶんじょう)を著し布教に用いた。